

## けがの防止意識を高める第5学年体育科保健領域学習指導

～総合的な学習の時間と関連づけた「可也小けがの防止資料」作成を通して～

糸島市立可也小学校  
養護教諭 宮野 紘代

こんな手立てによって…

第5学年体育科保健領域の学習と総合的な学習の時間を関連づけ、低学年へ向けた「可也小けがの防止資料」の作成と発表を行った。

こんな成果があった！

- ① 子供にけがの防止の意識が生まれた。
- ② 学校のけがの防止の課題を他者と協働して解決し、それを伝えることができた。
- ③ けがの防止意識を高める、体育科保健領域学習指導の在り方を究明することができた。

### 1 考えた

私は、昨年度からの5年生の子供の学校生活の様子を見て、学校や家庭生活、さらには将来に大きな事故やけがを起こしてしまうことを危惧した。子供一人一人が、けがをしないための知識を理解し、けがの防止の意識をもってほしいという思いが強くあった。そこで、本研究では、第5学年の保健領域の「けがの防止」の学習に参画し、子供がけがの防止意識を生み、けがの防止に関する理解を深めることで、けがの防止意識を高めることができ、それが子供の自分の命や健康を守ろうとする行動につながると考えた。そのため、けがの防止意識の向上を目指して、保健領域学習と総合的な学習の時間を関連づけた手立てを講じて、子供一人一人のよさや可能性を引き出しながら学習展開を設定した。

### 2 やって見た

#### (1) 体育科保健領域の学習と総合的な学習の時間を関連づけた TT での学習指導への参画

(保健領域の学習) 養護教諭の専門性を生かして、けがの防止意識を生む、単元導入の工夫を行った。

(総合的な学習の時間) 低学年へ向けた安全啓発活動を通して、他者と協働して学校のけがの防止に関する課題解決を行い、けがの防止の知識理解を深める、探究的な学習指導を行った。

#### (2) Google スライドを活用した低学年へ向けた「可也小けがの防止資料」作成

「可也小けがの防止資料」の作成段階で、ICT を活用して他者と協働した探求学習を行い、けがの発生要因やけがの防止方法を整理・分析し、まとめたことを低学年へ伝えることで、自らのけがの防止の理解を深め、意識を高めることができるように工夫した。

### 3 成果があった！

体育科保健領域学習と総合的な学習の時間の学習を関連づけた学習展開を行い、低学年へ向けたけがの防止安全啓発活動として「けがの防止資料」の作成の手立てを講じることは、けがの防止意識の高い子供を育成する上で有効であったと考える。

<目次>

**けがの防止意識を高める第5学年体育科保健領域学習指導**

～総合的な学習の時間と関連づけた「可也小けがの防止資料」作成を通して～

1	主題設定の理由	3
	(1) 現代社会の要請から	3
	(2) 新学習指導要領から	3
	(3) 本研究に関わる子供の実態から	4
	(4) これまでの体育科保健領域の学習における反省と課題から	5
2	主題の意味	7
	(1) けがの防止意識とは	7
	(2) けがの防止意識の高い子供とは	7
3	副主題の意味	8
4	研究の目標	9
5	研究の仮説	10
6	研究の構想	10
	(1) けがの防止意識を生む「けがの事例とハインリッヒの法則」の単元導入	10
	(2) 低学年への安全啓発活動「なりきり！KAYA 警察！」での課題解決学習	11
	(3) Google スライドを活用した「可也小けがの防止資料」作成・発表	12
7	研究の実際	15
	(1) 第5学年 体育科保健領域学習 単元 「けがの防止」	15
8	成果と課題	24
	<参考文献>	25

## けがの防止意識を高める第5学年体育科保健領域学習指導

～総合的な学習の時間と関連づけた「可也小けがの防止資料」作成を通して～

糸島市立可也小学校  
養護教諭 宮野 紘代

※ はじめに

本研究は、昨年度の令和4年度の実践である。

### 1 主題設定の理由

#### (1) 現代社会の要請から

令和3年1月の中央教育審議会答申では、「令和の日本型学校教育」の姿として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現をさせることが提言され、めざす子供の姿を「持続可能な社会の創り手」と示した。持続可能な社会の創り手とは、自分のよさや可能性を認識し、他者を尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓くことができることである。「持続可能な開発のための教育」の先駆者である手島利夫氏は、そのためには、社会や世界の現状を自分との関わりから「自分事」として捉えさせ、そのうえで問題意識をもたせ、仲間と問題意識を共有し、整理する中から共通の学習問題としてまとめ、その解決に向けて学び合い、課題克服への手立てを探り、実践に取り組み、体験や成果をもとに発信させていくことが重要であると述べている。なぜなら、問題解決的・探究的な学習経験なしに、自分自身・地域・世界の課題に立ち向かう技術を身に付けさせることはできないからだと指摘している（教育出版：第4回「持続可能な社会の創り手は、どのように育てたらいいのですか？」より）。

本研究では、体育科保健領域「けがの防止」の学習においてけがの防止意識を生み、自分事として考え、総合的な学習の時間の学習との関連を通して、身近な学校生活から課題を見付け、その問題を実際の現場調査活動を通して、他者と協働しながら解決に取り組み、その成果や発見を整理・分析し「可也小けがの防止資料」にまとめ、低学年へ伝える探究学習の活動の手立てを講じることで、保健学習での学びを最大限に生かすことができると考える。これは、令和の日本型学校教育がめざす「主体的・対話的で深い学び」を実現させることにつながり、持続可能な社会の創り手となる人材の姿に答えることになり、大変意義深い。

#### (2) 新学習指導要領から

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説では、現行学習指導要領の課題として、知識及び技能を活用して課題解決すること、学習したことを相手に分かりやすく伝えること等の課題があることを示した。それを踏まえ、体育科保健領域において、けがの防止につい

新学習指導要領改訂のポイント 体育科保健領域	
「けがの防止」	
新	旧
ア けがの防止に関する次の事項を理解するとともに、けがなどの簡単な手当をすること。 イ けがを防止するために、危険の予測や回避の方法を考え、それを表現すること。	(2) けがの防止について理解するとともに、けがなどの簡単な手当ができるようにする。

【資料 1：小学校学習指導要領体育科の改訂ポイント】

て課題を見付け、その解決を目指した学習を通して、けがを防止するために危険の予測や回避の方法を考え、それらを表現することと新たに示している（資料1）。そのために、身の回りの生活の危険などを取り上げ、けがの起こり方とその防止の知識、課題解決のための思考力、判断力、表現力が求められている。

以上のことから、これからの保健領域学習では「けがの防止について正しく理解し、学んだ知識を生かし他者と協働して課題解決に取り組み、情報を整理・分析・まとめて表現できること」が必要だと考える。そこで、保健的な見方・考え方を働かせながら、けがの知識理解を図り、学校生活でのけがの防止に関する課題を他者と協働し、学び合いながら解決しさらに理解を深め、低学年へ伝える活動を通して、自らのけがの防止意識を高める子供の姿をめざす本主題は意義があると考えられる。

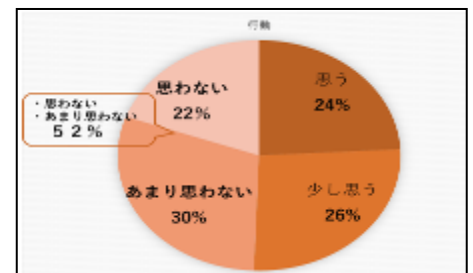
### （3）本研究に関わる子供の実態から

本研究対象5学年の学校での様子、事前の意識調査、担任の様相観察と保健室での関わりを通して、以下の実態を分析し、課題として3つのことが分かった。

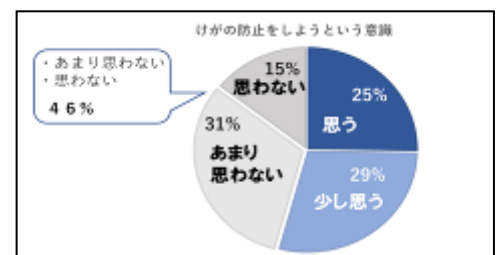
1つは、昨年度から学校生活において階段や廊下を走るなど危ない行動が目立っていた実態があった。けがをして保健室に来室する子供もおり、そのため、学級担任と指導することもあった。また、地域の方から、道路に広がって歩いているなどの危険な行動についての声もあがった。さらに登下校時には、不注意による転倒で、骨折をした子供もいた。

2つは、けがの事前意識調査から、「学校でけがをしたことはあるか」の問いに対し子供全員が「ある」と回答した。

「危険な行動をしたことがあるか」の問いに対し「ある」と回答した子供が半数いた。学級で「廊下を走ったことはありますか」と聞いた際も、全員の子供が挙手をした。このように、けがの経験や危険な行動があるにもかかわらず「けがをしないように安全に行動をしようと思うか」の問いに対し思わない・あまり思わないと答えた子供が52%いることである（資料2）。「けがを防止しようと思うか」の問いに対し（資料3）その理由として、「けがは、学習になる」、「けがはたまたま起こるから」、という意見があり、けがを防止する必要性を理解できていない子供もいた（資料4）。また「けがをしないように安全な環境に整えようと思うか」の問いに対し思わない・あまり思わないと答えた子供が50%いることも分かった（資料5）。さらに、「けがの原因を知っていますか」と問いに対し「分かりません」、「走っているから」との回答



【資料2：令和4年度5年生けがの意識アンケート結果】



【資料3：令和4年度5年生けがの意識アンケート結果】

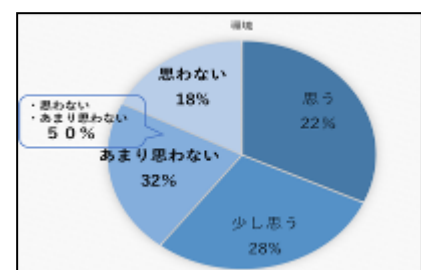
**けがの意識調査アンケート**

「けがをしないように、行動や環境を変えなくていいと思う理由」

回答

- ・けがをした方が学習になるから。
- ・けがをしても、なおるから。
- ・元気がしょうこだから。けがをしてもなおるから。
- ・ちょっとのけがなら、大丈夫だから。
- ・けがは、たまたま起こるから。だれでもするから。
- ・気をつけなくても、私はけがをしないから。

【資料4：令和4年度5年生けがの意識アンケート結果記述】



【資料5：令和4年度5年生けがの意識アンケート結果】

しかなく、けがの原因を正しく理解している子供は一人もいなかった。

3つは、学級担任の様相観察として、子供が授業の中で自分の考えを伝えることに課題があることが分かった。その理由として、新型コロナウイルス感染症の感染拡大予防のために、2020年から、発表する活動や、班での話し合い活動も制限され、他者と対話しながら自分の思考を深めていく機会が減ったことが挙げられた。

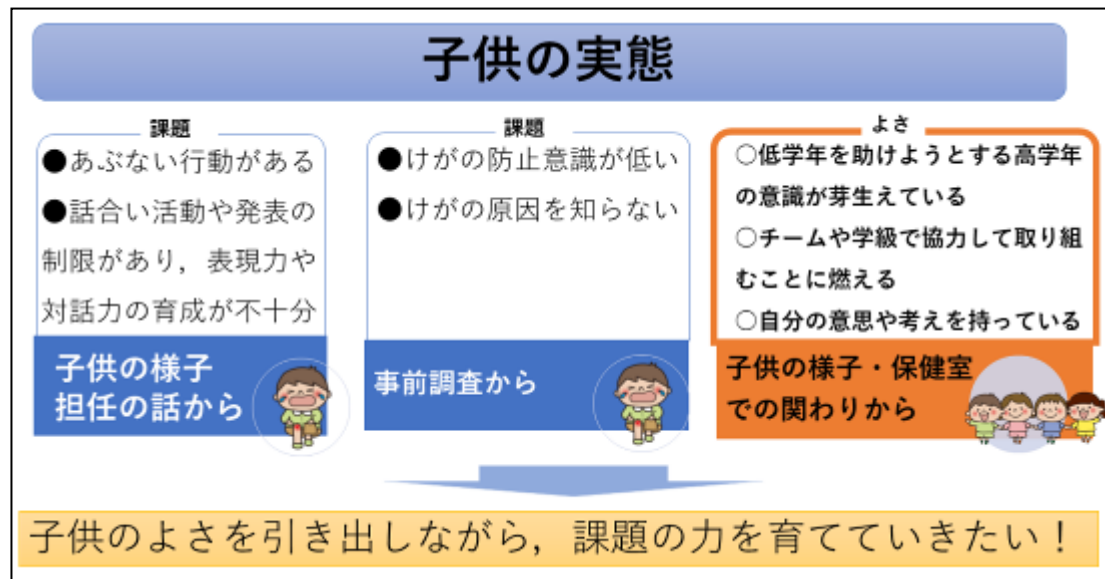
なお、子供たちのよさや強みとしては、3つのことを考えた。

1つは、5年生になり高学年らしい姿が見られてきたことである。具体的には、休み時間にけがをした低学年を見つけた時には、保健室と一緒に来室して、けがの状態を心配する姿を見ることがあった。保健室で休養する同級生や他学年の子供に声かけをする子供も多く、他者に優しく思やりのある行動ができることがよさである。

2つは、子供が男女関係なく仲がよいことである。休み時間には、男女共に遊ぶ姿がよく見られ、チームで協力する活動や、学級で力を合わせる活動では、一生懸命に取り組むことができる。また、学校行事や体育のリレー対決では、積極的に取り組む姿が見られた。このように、他者と協力して、力を発揮できるのは、5年生の子供の強みである。

3つは、授業の中で積極的に発表ができていない子供も、保健室で個別に会話をする時には、自分の意志や考えをもち話す姿が見られることである。話すことが苦手な子供も、気持ちや考えを整理して紙に書いて表現すること、養護教諭と伝える手段と一緒に考えていくことで、話したり文字にしたりして、考えを伝えることができる。

そこで、本研究対象の子供の実態から課題とよさを以下の図のように考えた（資料6）。



【資料6：5年生子供の実態】

以上のことをふまえ、子供のよさや強みである可能性を引き出し伸ばしながら、けがの防止意識を生み、けがの防止の知識理解と、低学年へ向けた啓発活動を通して、班で協働しながら課題解決に取り組み、「けがの防止資料」を作成・発表する探究活動の学習展開を行い、自らのけがの防止意識の向上をめざす。これは、子供の実態に即していて意義深い。

#### (4) これまでの体育科保健領域の学習における反省と課題から

本校では、体育科保健領域「けがの防止」学習を学級担任と協力しTTで授業に参画している。

本研究では、4回目の学習指導になるが、これまでの指導における反省は4つある。

1つは、けがをすることは「痛い」や「困る」などの指導しかしておらず、子供が大きな事故やけがは「他人事」だと感じており、「自分事」として捉えておらず、けがの防止意識を生むことができなかった。

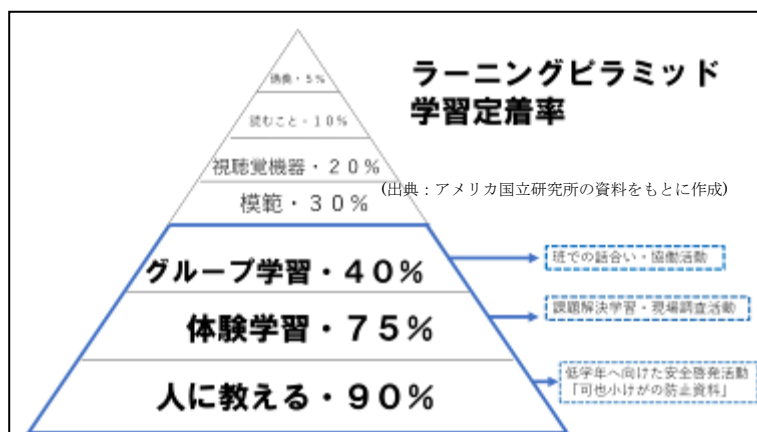
2つは、けがの発生原因は「人の行動」と「身の回りの環境」の2つであることの理解ができていなかった。そのため、子供が今までの学校生活での経験を考えることはできたが、自分がけがをしたことがない場所からけがの原因を考え、危険予測・回避方法を考えることができていなかった。さらに「環境」の視点が分からずに悩む子供が多くいたが、具体的な環境について指導が不足していた。

3つは、学校におけるけがに関する課題解決では、目的意識を高め、見通しをもつ指導をしていなかったため、なぜ他者と協働してけがの防止に関する課題解決をしているのかが曖昧になった。

4つは、保健領域学習の指導のみを行っていたため、保健の見方・考え方を最大限に引き出す学習過程の工夫をしていなかった。

なお、右の図1は、アメリカ国立研究所のラーニングピラミッドの資料をもとに表した図である。講義は、5%しか維持されない反面、グループ学習では40%、体験学習では75%、人に教えることは90%が持続され、効果的な学習方法である。養護教諭として授業に参画しているが、私の学習指導は講義型の傾向であると考えた。このため、子供の「けがの防止意識を高める」ことができず、授業後に学校生活での行動様式の変容があまり見られなかった結果に至った。この反省は、私の学習指導の課題が要因であると考えた。

以上のことから、本研究の改善点を3つ考えた。



【図1：ラーニングピラミッドと本研究のイメージ図】

**改善点1**：けがの防止意欲を高め、けがの知識理解を図る養護教諭の専門性を生かした学習の工夫。

**改善点2**：子供がけがの防止について、他者と協働してけがに関する課題解決を行い、体験活動を取り入れる。

**改善点3**：他者に、けがの知識やけがの防止について学んだことを伝える学習展開を行う。

本研究対象の子供は、特にけがの防止意識が低いことから、「けがの防止意識」を高めることが必要であり、これまでの私の学習指導ではその力を高める効果は期待することができないと考えた。そこで、本研究で、保健学習から総合的な学習の時間に関連させ、低学年へ向けたけがの防止安全啓発活動のために他者と協働して課題解決を行い、「可也小けがの防止資料」の作成・発表の学習展開をすることは、これまでの指導の反省と課題からも意義があると考える。

## 2 主題の意味

### (1) けがの防止意識とは

自分の生活において、けがをしないようにしようという意識をもつことである。

交通事故や身の回りの生活の危険が原因となって起こるけがの防止には、けがの発生要因から、危険を予測し、けがの回避の方法を理解し実践する意欲があることである。

### (2) けがの防止意識の高い子供とは

身の回りの生活の危険が原因となって起こるけがの防止には、周囲の危険に気付き、的確な判断の下に安全に行動すること、環境を整えることが必要であることを理解し、危険の予測や回避の方法を考え、健康で安全な生活を実践することができる子供である。

ここでは、第5学年体育科保健領域学習におけるけがの防止意識に絞って定義する。

本研究では、けがの防止の学習における、ア知識及び技能（ア）交通事故や身の回りの生活の危険が原因となって起こるけがとその防止、イ思考力、判断力、表現等の、けがを防止するために、危険の予測や回避の方法を考え、それらを表現することについて実践を行う。また、けがの発生要因には、「人の行動」と「身の回りの環境」が関わっており、さらに「人の行動」には、「心の状態と体の調子」が関係していることも理解できるようにし、「身の回りの環境」では、整理整頓がされていないこと、壊れている場所があること、地面の状態や、天候に関連することに気付くことである（資料7）。



【資料7：東京書籍 新しい保健5・6年生事故やけがが起こるときの原因】

なお、「けがの防止」について理解をするためには、保健的な見方・考え方を働かせることが重要である。学習指導要領解説体育編には、保健的な見方・考え方では傷害を防止するとともに、「個人及び社会生活における情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える健康づくりと関連づけること」とある。小学校においては、「特に身近な生活における課題や情報を、保健領域で学習する健康で安全な生活についての概念等に着目して捉え、けがをするリスクの軽減や心身の健康の保持増進と関連付けること」である。つまり、保健的な見方・考え方を働かせる際には、次の3つが必要である。

1つは、けがを防ぐ意義を理解し、興味関心を高めながら、けがの知識や技能を身に付けること。（主体的な学び）

2つは、身近な生活におけるけがに関する課題に気付き、他者と協働しけがを防止するための情報を活用し課題を解決していこうとすること。(対話的な学び)

3つは、けがの防止の知識理解と、身近な生活に関する課題解決の探究学習を通して、けがの防止に関する課題を見付け、他者に伝えることで思考を深めていくこと。(深い学び)

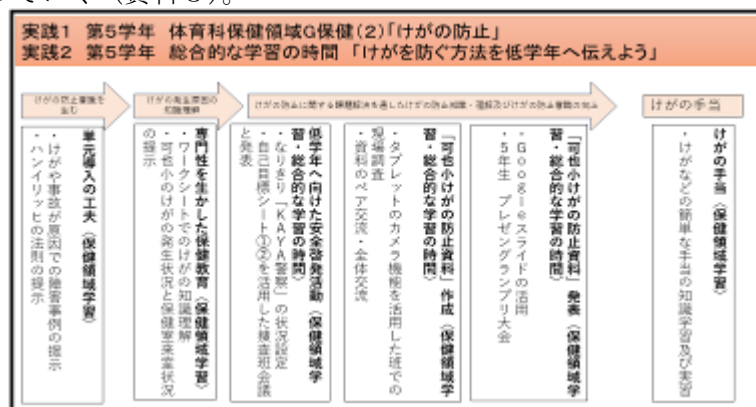
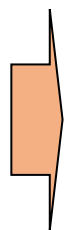
この3つは、連続して発展しながら、けがの防止意識をもち、身近な生活での課題解決を図り、けがの防止意識の向上から実践意欲へと導かれる。なぜなら、けがの防止について学ぶ意義を見だし、正しく理解することで、学んだ知識を生かし他者と協働して課題解決に取り組み、さらに学びを深めることでけがの防止意識が高まり、その意識を働かせながら自らの安全な生活を送ることができる資質・能力になると考える。

### 3 副主題の意味

#### ア 「総合的な学習の時間を関連づける」とは

前述したように、これまでの学習指導の反省として体育科保健領域の学習だけでは、子供のけがの防止意識を高めることが不十分であった。そこで、保健領域学習で学んだけがの知識を、保健の見方考え方を働かせながら総合的な学習の時間の探究的な学習過程に関連づけ、活用しながら子供の学習指導を行う。総合的な学習の時間の学習では、探究的な学習にするために①【課題の設定】体験活動などを通して、課題を設定し問題意識をもつ②【情報の収集】必要な情報を取り出したり、収集したりする③【整理、分析】収集した情報を、整理したり分析したりして思考する④【まとめ・表現】気付きや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する学習過程を具現することが重要である。この、学習過程に保健領域学習での学びを発揮しながら、けがの防止意識を高める学習指導の展開を行っていく(資料8)。

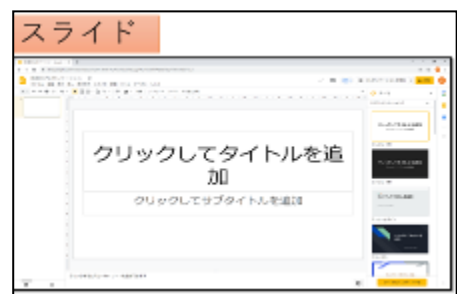
実施時期	実施内容
R4.9	実態調査
R4.10 ～12月	保健領域学習(実践1) 総合的な学習の時間(実践2)



【資料8：体育科保健領域学習と総合的な学習の時間を関連付けた計画】

#### イ 「可也小けがの防止資料」作成・発表とは

低学年に向けたけがの防止安全啓発活動を目的として、学校内や校庭等において、①けがの起こりそうな場所を予測し課題を見付ける②学校のけがの防止に関する課題について、けがの発生要因・危険予測・回避の方法の情報収集・分析を班で協働し、解決する③Google スライド(資料9)を活用し、情報を整理し「可也小けがの防止資料」にまとめる④作成資料を学級で発表し、低学年・全校へ発表するという、一連の活動のことである。



【資料9：Google スライド】



けがの防止啓発活動をする対象を低学年に設定にした理由は2つある。1つは、学校でけがが多い学年は低学年であるという根拠が保健室の来室記録としてあることである。このことは、根拠だけでなく第5学年の子供も学校生活の中で気付いていると予想した。なぜなら、低学年のけがをした子供を保健室に連れてくることが多くあったり、さらには、けがをした低学年の子供を心配する高学年らしい姿が見られたことである。このことから、低学年に対して、けがを防止する健康意識を伝えることで、学校生活でのけがの課題を見付ける意欲を高め、他者と協働して課題解決に取り組むことができる考えた。さらに、その活動を通して、自らのけがの防止意識も高めることができるのではないかと考えたからである。

2つは、けがの防止資料作成・発表において、今までの学習指導では「聞く相手に分かりやすい資料」として指導を行ったが、具体的に「分かりやすい資料とは」どのような資料なのかが明確でない課題があった。このことから、学校の中で最も年が離れている「低学年が見て分かりやすい資料」と示すことで、子供たちが低学年にふさわしい言葉を使い、分かりやすい表現方法で資料作成や発表をすることで相手意識ができるのではないかと考えたからである。さらに、低学年に分かりやすくするためには、情報を整理したり、分析したりして資料作成をする必要がある。それは、けがの防止について正しく理解していなければできない活動であるため、子供の一人一人の理解度を確認することにもつながると考えたからである。そこで、「可也小けがの防止資料」は、一人一人が個人で作成する。

また、けがの防止資料作成に、Googleのスライド機能を活用することにした理由は、スライド機能は、写真や動画、文字を一枚のスライドとして作成することができ、発表の際には、スライドショーの設定で説明しながら見せることができる。さらに、クラスルームに課題として配付することで、各自の作成状況を教師が確認することができ、教師側がコメントできる機能もあるので、学級担任でない私が子供と離れている状況でも、一人一人に評価の言葉や助言の指導ができると考えた。

以上のことから本研究においてめざす子供の姿を以下の3つに設定する。

- ① 身の回りの生活の危険が原因となって起こるけがの発生原因が「人の行動」と「身の回りの環境」であることを理解している子供（知識・技能）
- ② 学校でのけがの防止についての課題を、他者と協働して解決し、けがの危険予測・回避方法を他者へ表現することができる子供（思考・判断力・表現力）
- ③ けがを防止について、安全の大切さに気付き、的確な判断の下「安全に行動すること」、「身の回りの環境を整える」意識をもつ、けがの防止意識の高い子供（学びに向かう力・人間性）

#### 4 研究の目標

けがの防止意識を高める第5学年体育科保健領域「けがの防止」の学習指導のために、TTでの体育科保健領域学習に参画し、体育科保健領域の学習と総合的な学習の時間を関連づけた「可也小けがの防止資料」の作成指導を通じた学習展開の効果的な在り方を究明する。

## 5 研究の仮説

第5学年、保健領域「けがの防止」学習指導において、総合的な学習の時間に関連づけた低学年へ向けた「可也小けがの防止資料」の作成・発表の学習指導の手立ての工夫を次の点で具体化を図れば、「けがの発生原因が人の行動と身の回りの環境であることを理解」し、「学校生活でのけがの防止についての課題解決を他者と協働して取り組み、それを伝えること」ができ、「けがを防ぐために安全に行動し、環境を整えようとする」けがの防止意識の高い子供が育つであろう。

### 視点1（導入段階）体育科保健領域学習

・けがの防止意識を生む「けがの事例とハインリッヒの法則」の単元導入

### 視点2（展開段階）体育科保健領域学習・総合的な学習の時間

・低学年へ向けた安全啓発活動での課題解決学習

### 視点3（展開段階）体育科保健領域学習・総合的な学習の時間

・タブレットのカメラ機能を活用し、他者と協働した探究学習

### 視点4（終末段階）体育科保健領域学習・総合的な学習の時間

・Google スライドを活用した「可也小けがの防止資料」作成・発表

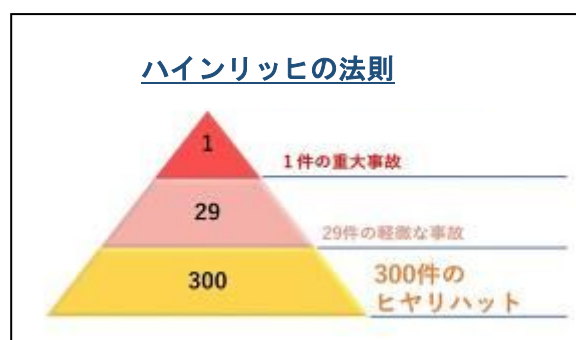
## 6 研究の構想

### （1）けがの防止意識を生む「けがの事例とハインリッヒの法則」の単元導入（視点1）

けがの防止意識を高めるためには、けがをしないようにする必要性を理解し、けがの発生原因の理解から危険予測・回避方法まで考えることができることである。高学年となった本研究対象の子供は、学校生活や家庭生活での軽微なけがは、誰もが経験をしている。その経験の中で、けがをしても治ることや、けがの痛み慣れたことから、けがをしても平気であり、さらには、けがの経験も大事であると考えており、慣れた身近な学校生活から軽微なけがを予防する必要性を感じていない。しかし、その意識や習慣は将来大きな事故やけがにつながる可能性が高くなると考える。子供のけがの防止意識を生むために、TTでの保健領域学習に参画し、養護教諭としての専門的な知識を発揮していく。具体的には、「日本スポーツ振興センターの傷害事例」（資料10）を提示し、大きなけがが身近な生活でも起こることに気付くことができるようにする。ハインリッヒの法則とは、「1件の重大事故の裏には29件の軽微な事故と300件の怪我に至らない事故がある」と定義されている。重大事故という「結果」は不安全な行動や不安全な状態である「原因」から生まれるものである（資料11）。これは、労働災害におけるけがの程度を分類したものであり、このヒヤリハットが顕在化した危険に対策を講じることで、重大事故の発生が抑止できると考えられる。この法則を子供の身近な生活に置き換え、1件の大きなけがや事故には、29回の軽いけがと、300回のけがが起きそうなヒヤリとした経験として、

体育の水泳後に、教室に戻る際に、廊下で前を歩く他の児童の名前を呼びながら小走りしていたところ、ろう下の水で足をすべらせてしまい、転んだ。その時、床で左こめかみ部分をだぼく。

【資料10：日本スポーツ振興センターけがの事例】



【資料11：ハインリッヒの法則】

傷害事例」（資料10）を提示し、大きなけがが身近な生活でも起こることに気付くことができるようにする。ハインリッヒの法則とは、「1件の重大事故の裏には29件の軽微な事故と300件の怪我に至らない事故がある」と定義されている。重大事故という「結果」は不安全な行動や不安全な状態である「原因」から生まれるものである（資料11）。これは、労働災害におけるけがの程度を分類したものであり、このヒヤリハットが顕在化した危険に対策を講じることで、重大事故の発生が抑止できると考えられる。この法則を子供の身近な生活に置き換え、1件の大きなけがや事故には、29回の軽いけがと、300回のけがが起きそうなヒヤリとした経験として、

子供に提示する。その際に、子供が自分の生活を振り返り自らの課題に気付くことができるように、事前意識調査「学校でヒヤッとした経験はありますか」の結果についても示す。事前意識調査では、9割の子供が「学校でヒヤッとした経験がある」と回答している。次に、教科書の挿絵とワークシートを活用し、けがの発生原因を見付け、けがの原因を「人の行動」と「身の回りの環境」に分けて考えることができるようにする。また、「人の行動」についての事例と「身の回りの環境」についての事例を、保健室来室データや、実際の場所の写真から具体的に提示することで、身近な生活から課題を見付けることができるようにする。さらに、「人の行動」と「身の回りの環境」の視点は、単元全体を通して導入の時間で必ず復習をする。

## (2) 低学年への安全啓発活動「なりきり！KAYA 警察！」での課題解決学習（視点2）

可也小のけがの多い学年について、学校のけがの記録を示し、低学年にけがが多いことに気付くことができるようにする。その後、学習した知識を生かし、低学年のけがを減らすことを目標にして、「なりきり！KAYA 警察！」として低学年へ向けたけがの防止安全啓発活動の学習展開を行う。具体的な流れは、①捜査班に分かれ、第1回班会議として学校のけがの起こりそうな場所を予想する②予想した場所に行き現場調査を行った後に、第2回班会議で調査結果を話し合う③班で協働し、けがの防止の課題解決をする④「可也小けがの防止資料」を作成・発表する。

第1回班会議では、目標設定シート①（資料1 2）を活用する。目標設定シート①②では、子供の意欲を高めながら、具体的な目標を決めるために「S：スペシャル刑事」「A：ベテラン刑事」

「B：先輩刑事」「C：新人刑事」と設定し、学習後には達成度を記入させ学習の振り返りを行う。身近である学校生活から、けがの起こりそうな場所を、学校の校内と運動場などの写真を参考に、けがの原因である「人の行動」と「身の回りの環境」の2つの視点から危険な場所を予想する。その際、2つの視点で予想することが難しい子供には、他者から教えてもらったり、場所だけを見付けるといったスモールステップの活動を示したりすることで、全員が意欲的に取り組む姿をめざす。また、一人一人の理解度を知らするためのツールとしても活用するねらいがある。

目標設定【個人活動けがの予想】			
スペシャル刑事(S)	ベテラン刑事(A)	先ばい刑事(B)	新人刑事(C)
けがの起こりそうな場所を自分で考えることができた。 どんなけがが起こるか、「人の行動」と「環境」から予想することができた。	けがの起こりそうな場所を自分で考えることができた。 どんなけがが起こるか予想することができた。	けがの起こりそうな場所を、自分で考えることができた。	けがの起こりそうな場所を、班の人に聞いて考えることができた。
けがの原因を「人の行動」「環境」の視点から考える。		けがの予測を考える。	
けがの原因を考えるのが難しい児童にも、人から教えてもらうこと、けがが起こりそうな場所に気付くことを目標とする。			

【資料1 2：目標設定シート① 個人活動けがの予想】

目標設定【話し合い活動】			
スペシャル刑事(目標S)	ベテラン刑事(目標A)	先ばい刑事(目標B)	新人刑事(目標C)
「人の行動」と「環境」から説明し、けがを防ぐ方法を伝えることができた。	けがの原因を、「人の行動」と「環境」で説明することができた。	場所を伝え、「人の行動」と「環境」どちらからか伝えることができた。	けがの起こりそうな場所を、伝えることができた。
今日の達成度 (S/A/B/C)	けがの原因を「人の行動」と「環境」から説明する。けがの原因からけがを防ぐ方法を考えることができるようにする。学習の終わりに、達成度を記入させることで、振り返りをする。		話し合いに自信がない児童は、けがの起こりそうな場所だけでも伝えることを目標にする。

【資料1 3：目標設定シート② 話し合い活動】

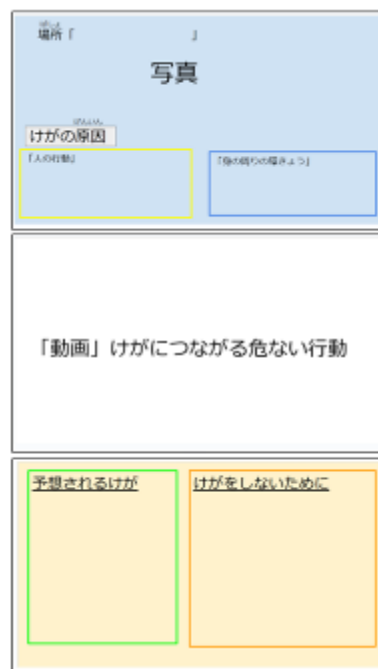
### (3) タブレットのカメラ機能を活用し、他者と協働した探究学習（視点3）

第2回班会議では、目標設定シート②（資料13）を活用する。

学校の危険な場所でのけがの原因を「人の行動」「身の回りの環境」の視点で捉え、危険予測・回避方法まで関連づけて説明できるようにする。また、けがの防止資料作成において、分かりやすくまとめ、他者に伝えることができるようにする。さらに、本研究対象の子供の課題である表現力を伸ばすねらいがある。この指導過程では、子供が見通しもって活動に取り組めるように活動の具体的な流れの見通しを明確に子供に提示する（P18・資料23）。

### (4) Google スライドを活用した「可也小けがの防止資料」作成・発表（視点4）

スライド機能を活用して、資料に載せる内容を「けがの原因（人の行動）（環境）」「予想されるけが」「けがを防ぐ方法」の枠を作りスライド原本（資料14）として子供に各自配付する。スライド作成前には、けがの防止資料に載せる写真や動画について、相手に分かりやすく示すことができるために、分かりやすい写真の比較（資料15）や教師が撮影した動画の参考資料を提示し、写真や動画を具体例に示す。資料の作成過程では、抽出した子供の作成途中の資料を全体で発表し共有しながら、資料作成を進めていくことで、資料の整理・分析に役立てるようにする。次に、作成した資料をペア・班で交流し、お互いの資料のよいところや、さらに改善するとよい箇所を伝え合い、資料内容の改善を行う。さらに、教師はGoogleスライドのコメント機能を活用して、子供の作成進度や内容を確認し、内容の評価や助言を行う（資料16）。



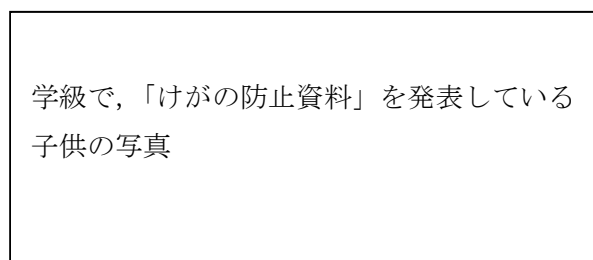
【資料14:Googleスライド原本】

子供が推敲しながら資料作成を行うことで、けがの防止の意識や理解をさらに深めたり、他者の意見を聞き考えを広げたりすることをねらいとする。最後に、完成したけがの防止資料を学級全体で「5年生P-1グランプリ」として発表する場を設定する。なお、Pはプレゼンテーションの頭文字の意味である。

P-1グランプリでは、聞く側の子供たちは、審査員として発表者の評価を行う。P-1グランプリでグランプリに選ばれた上位2名が、低学年への発表をして、児童保健委員会の5年生が全校の子供へ向けたけがの防止資料の発表を行う（写真1）。



【資料15:分かりやすい写真の比較】



【写真1:「けがの防止資料」発表の様子】



【資料16:Googleスライドでの教師からのコメント】

可也小けがの防止資料作成・発表の具体的な計画は、次の通りである。

【可也小けがの防止資料作成・発表計画】

活動内容	ねらい	教師の手立て
<p>① 班会議（全2回）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校のけがの起こりそうな場所を「人の行動」と「環境」から予測する。</li> <li>・個人考察から班で話し合う。</li> <li>・班の意見を全体で交流する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目標設定シート①②を活用することで、けがの発生原因・危険予測・回避方法を考え、伝えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いで、けがの原因から危険予測・回避方法を考え伝えられるように、目標設定シート①②で目標を立て、話し合い活動後に自己の振り返りを行うことができるようにする。</li> </ul>
<p>② 現場調査（全1回）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・けがの起こりそうな場所の現場に行き、けがの状況を「人の行動」と「環境」から危険予測・回避方法を考える。</li> <li>・タブレットのカメラ機能を使い、班で協働して危険な人の行動や、危険が潜む環境のある場所を写真や動画で撮影する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・けがの起こりそうな場所を、自らで探すことで、課題解決の意欲を高める。</li> <li>・けがの起こりやすい場所を実際に見て調査することで、けがの防止の方法を見付けることができる。</li> <li>・他者と話し合うことで、考えや学びを深める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班で協働して課題解決に臨むように、現場調査のポイントをおさえる。（ポイント）</li> <li>・「人の行動」と「環境」の視点</li> <li>・分かりやすい現場写真の提示</li> <li>・班で協働してけがの防止についての課題解決を行うこと</li> </ul>
<p>③ けがの防止資料作成（全2回）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人が「可也小けがの防止資料」作成を行う。</li> <li>・Google スライドのコメント機能を確認し、養護教諭からの評価やアドバイスから資料の推敲を行う。</li> <li>・作成後、ペアと班でけがの防止資料の説明を行い他者と話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人作成を行うことで、他者に任せることなく、課題解決をすることができる。</li> <li>・スライド資料を各自に配付することで、教師が一人一人の学習理解や進捗を把握し、個別に評価することができる。</li> <li>・資料の作成を他者と交流することで、考えを深め、分かりやすい資料の改善を行うことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料作りが行いやすいように、事前に資料の原本を、各自にクラスルームでスライド資料の課題配付する。</li> <li>・作成過程の資料内容を確認し classroom のコメント機能を活用し、評価をコメントする。</li> <li>・学級では、ペアと班資料説明の交流をし、相手の分かりやすいポイントや改善ポイントを伝え合うことができるようにする。</li> </ul>
<p>④ 発表「P-1グランプリ」（全2回）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学級全体で、一人一人が資料の発表を行う。</li> <li>・発表者以外は、審査員として資料の内容や発表の仕方を審査する。</li> <li>・審査内容は「内容」「画像」「声」の3つを設定し、1～4点で点数をつける。</li> <li>・発表後に、グランプリを3名選ぶ。</li> <li>・学級でグランプリ2名を選出し、低学年へ発表を行う。</li> <li>・児童保健委員会の5年生は、全校へ向けた資料発表を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校でのけがの防止の危険予測・回避方法を伝えることで、けがの防止の知識理解の定着を図る。</li> <li>・けがの防止についての考えを、表現することができる。</li> <li>・聞く側は、審査員として参加することで、聞く側の目的意識を高め内容の分かりやすさ、発表の仕方の工夫を自らの発表にも生かすことができる。</li> <li>・けがの防止意識をさらに高めることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表の際のポイントをおさえる。（ポイント）</li> <li>・内容に「人の行動」と「環境」を具体的に書いているか</li> <li>・画像や動画は伝える相手に分かりやすく表現できているか</li> <li>・相手に伝える声の大きさやスピードは適切か</li> <li>・聞く側の、視点をもたせるために、上記のポイントができていないか評価することで、けがの防止についての考えを伝えることができるようにする。</li> </ul>

## 【ICT の活用】

ICT の活用については、次の通り計画をする。(全4回)

活用機能	活用内容
1回目 カメラ	けがの起こりそうな場所を個人で撮影し、班交流で撮影した場所を見せながら説明する。
2回目 カメラ	けがの起こりそうな場所を班で撮影する。 人の行動を動画で撮影し、危険な環境を写真で撮影する。
3回目 Google スライド	各学級の保健学習 classroom から、課題配付された Google スライドでけがの防止資料を作成する。
4回目 Google スライド	完成したけがの防止資料のスライドを、テレビ画面に映しスライドショーで発表する。

## 【検証方法】

本研究における、検証方法は次の通りである。

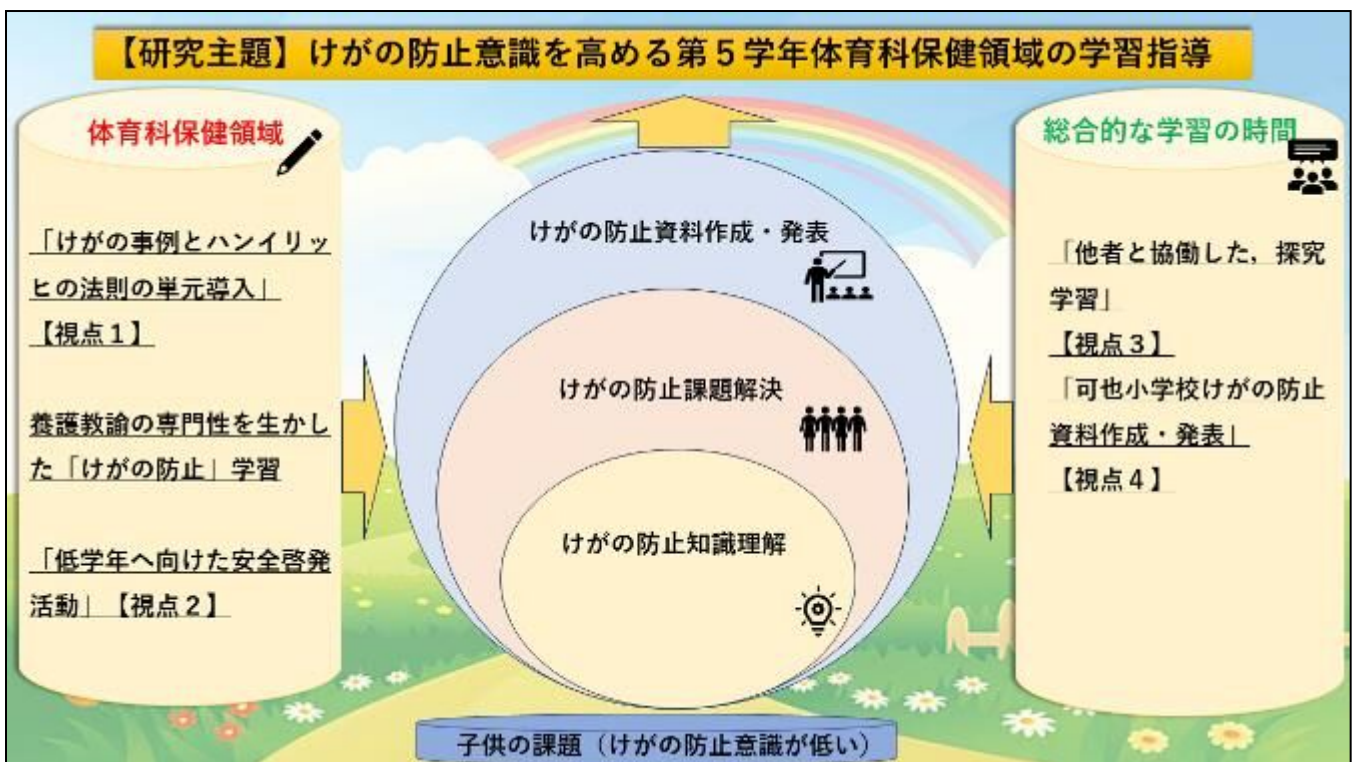
視点1：事後の意識調査 [けがを防止しようとする意識] 小テスト結果 [けがの原因について]

視点2：学習プリント [目標設定シート①②]，子供観察 [発表・発言・子供の様子]

視点3：学習プリント [現場調査のまとめ]，子供観察 [子供の活動の様子]

視点4：「可也小けがの防止資料」，子供観察 [発表の様子]

## 【研究構想図】



〔図6：研究構想図〕

## 7 研究の実際

### (1) 令和4年10月実施

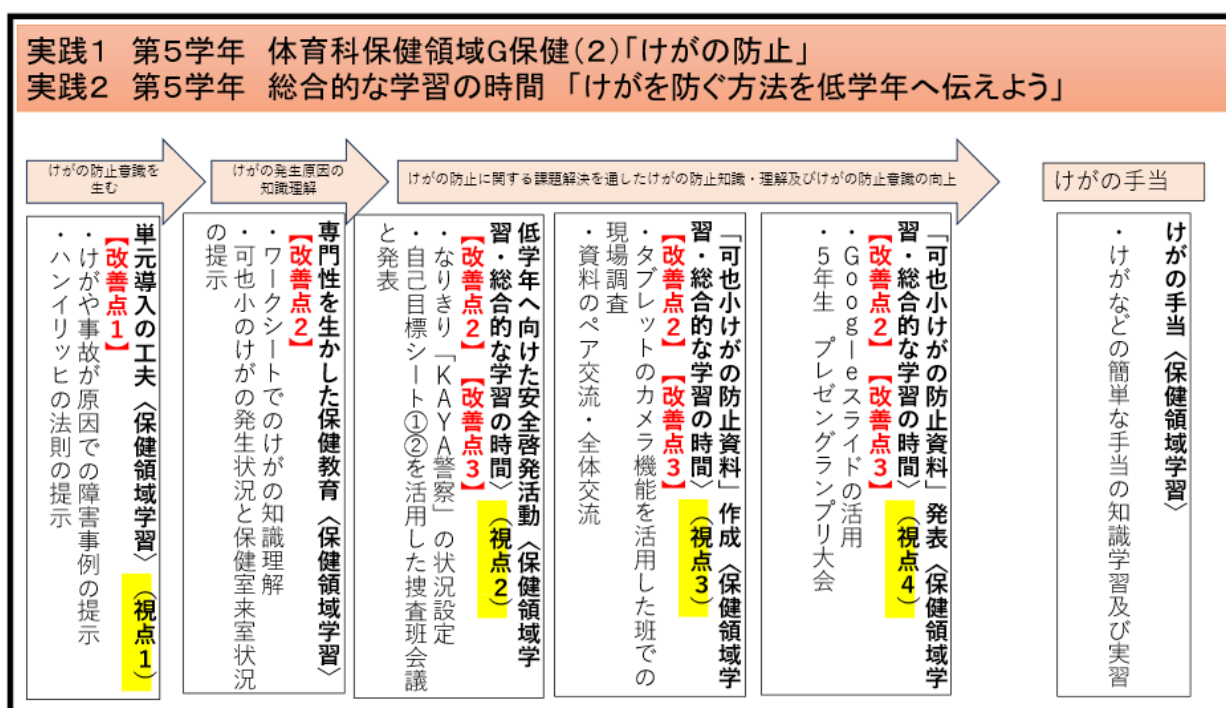
#### 第5学年 体育科保健領域学習 単元「けがの防止」

##### 目標

- 交通事故や身の周りの生活の危険が原因となって起こるけがの防止には、周囲の危険に気付くこと、安全に行動すること、環境を安全に整えることが必要であることを理解できるようにする。【知識・技能】
- 身近なけがの防止の課題を見付け、危険の予測や回避方法を考え、それらを表現できるようにする。【思考力・判断力・表現力】
- けがの防止について、健康・安全の大切さに気付き、自己の健康の保持増進や回復に進んで取り組むことができるようにする。【学びに向かう力・人間性】

### (2) 指導の実際

次の資料17のように、指導過程に4つの視点を位置づけて実施した。



【資料17：授業計画における4つの視点と3つの改善点】

#### ア 視点1（導入段階）体育科保健領域学習

けがの防止意識を生む「けがの事例とハインリッヒの法則」の単元導入

##### 導入段階（1～2／8時）のねらい

大きな事故やけがを防ぐためには、日頃からけがの防止意識をもつことに気付き、けがの原因が「人の行動」と「身の回りの環境」であることを理解できるようにする。（知識・技能）

本段階ではまず、けがの防止意識を生むことをねらいとした。そのために、学校生活でのけがの経験についてのアンケート結果を提示した。そして、「けがをすることは悪いことですか。」と発問をすると「けがをしてもよい。」という発言があった。そこで、幼少期からの成長過程で、け

がの経験をしながら危険に気付き身を守ることができようになるよい面もあることを話し合った。次に、けがの障害事例（P10・資料10）を提示した。これは自校でも、同じ環境下や状況になることがあるために選んだ事例である。身近に起きる軽微なけがが、障がいの残る大きなけがにつながることに気付くために、この事例の子供は左目を失明したことを伝えた。けがをしても治るという意識を変えるために、失明するとは、視力が失われることであり、一生視力が戻ることはないこと、一生残る障がいであることを説明した（写真1）。

T2：「けがをすることは悪いことですか？よいことですか。」

C1：「けがをすることは経験になるので、よいことです。」

C2：「けがをしても治るし、大丈夫です。」

反応：子供たちの半分以上が、うなずいている。

～けがの事例（資料10）を提示する～

T2：「可也小学校でも、起こりそうなけがですか。」

反応：子供の全員が、うなずいている。

C3：「私もこんなけがをしたことがあります。」

T2：「経験ををしたことがあるのですね。このけがをした子は、どんなけがをしたと思いますか。」

C4：「打撲だと思います。」

T2：「このけがをした子は、こめかみを打って左目を失明してしまいました。」

反応：静まりかえる。

T2：「目が失明するとは、どういうことか知っていますか。」

C5：「目が見えなくなることです。」

T2：「そうですね。目が見える力。視力を失ってしまうことです。これは、治りますか？」

反応：子供たちは、全員首を横にふる。

C6：「治りません。」

T2：「もう一度、聞きます。けがをすることは悪いことですか？よいことですか？」

反応：子供たちが考え込む様子を見せる。

【けがの事例における子供とのやりとり】



【写真2：けがの事例を話す様子】

最後に、大きな事故やけがを防ぐために、軽微なけがを防ぐ意識をもたせることをねらいとした。そのために、ハインリッヒの法則を提示し、1件の大きなけがや事故には小さなけがや、ヒヤッとした経験が関わっていることを示した。さらに、第5学年の子供の9割がヒヤッとした経験をしたことがあるというアンケート結果を提示した。そして、これからの生活で大きな事故やけがにあわないようにしてほしいこと、命を大切にしてほしいという思いを強く訴えた。最後に、けがの発生原因の理解をねらいとし、教科書の例題（けがをする場面の挿絵）から情報を整理して、けがの原因には「人の行動」と「身の回りの環境」が関わっていることを理解できるようにした。人の行動には、心の状態と体の調子に関わっていることもおさえた。次に、例題からけが

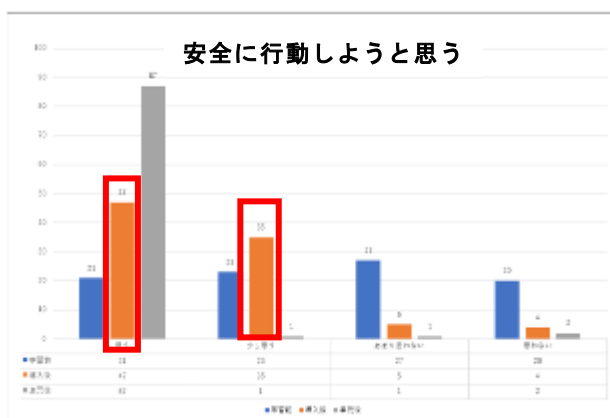


を防ぐための人の行動と環境の情報を整理し、けがの防止の方法を理解できるようにした。

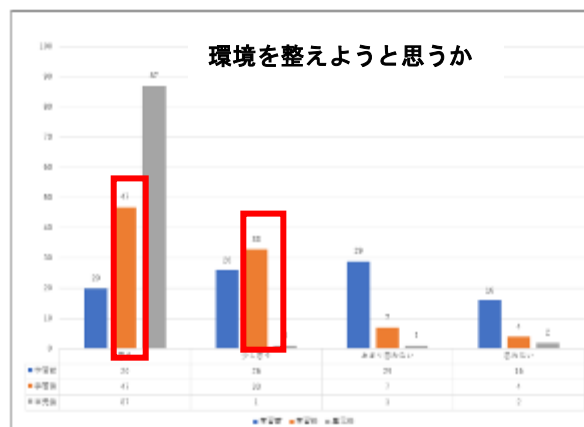
【考察1】

視点1：けがの防止意識を生む「けがの事例とハインリッヒの法則」の単元導入

けがの事例で「けがをすることは、よいことなのか。けがを防ぐ必要はないのか」と考えを揺さぶり、ハインリッヒの法則を提示する単元導入を行ったことで、子供自らが「大きな事故やけがを防ぐために、日頃から小さなけがを防ぐことが必要である」というけがの防止意識を生む場を設定したことは有効であった。具体的には、授業後の意識調査から、けがをしないために安全に行動しようと思う子供が26名、少し思う子供が12名増えた(資料18)。身の回りの環境を整えようと思う子供が27名、少し思う子供が7名増えた(資料19)。また、子供の学習後のアンケートの理由記述(資料20)では、「小さなけがをすることが大きな事故やけがにつながるかもしれないことが分かった」、「一生障がいが残るけがにつながる」とある。さらに、導入後の教科書の例題の学習プリントの記述(資料21)から「あせらずにゆっくり行ったらけがをしなかった。余裕をもって早く教室に戻ろうとすればよかった。(人の行動)」「スコープが置かれたままであること(環境)」、「置かれたままのスコープ注意すること(人の行動)」の視点で発生原因を考えることができていた。そして、記述内容について挙手し発言する子供が9割近くいた。以上のことから、視点1：けがの防止意識を生むけがの事例とハインリッヒの法則の単元導入は大変有効であったと考える。



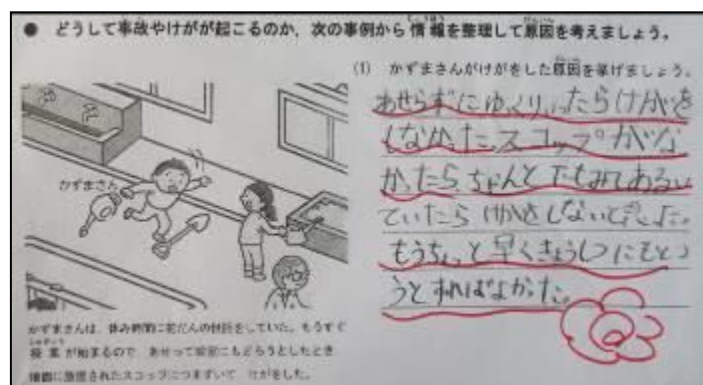
【資料18：事後アンケート結果(安全に行動しようと思うか)】



【資料19：事後アンケート結果(環境を整えようと思うか)】

授業後の子供の記述より  
(思うと答えた理由)  
 ・小さなけがが大きな事故やけがにつながる可能性があるから分かったから、けがをしないようにしたい。  
 ・小さなけがをしていると、一生残るけがや命の危険があるから。

【資料20：学習後のアンケート記述】



【資料21：学習プリントの記述】

## イ 視点2（展開段階）体育科保健領域学習・総合的な学習の時間

低学年への安全啓発活動「なりきり！KAYA 警察！」での課題解決学習

## ウ 視点3

タブレットのカメラ機能を活用し、他者と協働した探究学習

### 展開段階（3～5／8時）のねらい

学校生活でのけがの防止についての課題に他者と協働して解決に取り組み、危険予測・回避の方法を表現できるようにする。（思考力・判断力・表現力）

この段階では、学校生活でのけがに関する課題を見付け、他者と協働して積極的に解決に取り組むことをねらいとした。そのために、「伝説の刑事率いる30名の仲間達～KAYA 警察！～」という状況の設定をして、子供が学級や班で協力する意欲を引き出した。次に、けがの防止についての課題に気付くことができることをねらいとした。そのために、高学年になり、保健室にけがをした低学年を連れて来室することができていること、優しく声をかける姿があることを褒めながら「低学年のけがを防ぐために、安全活動しよう」と設定し、Google スライドで「けがの防止資料」を作成する学習活動の見通しをもてるようにした。

T2：ここは、KAYA 警察です。KAYA 警察には、伝説の O（学級担任のイニシャル）刑事率いる30名の仲間たちがいます。

T2：そこに、M（養護教諭のイニシャル）さんからこんな相談がありました。（右の資料22を提示して読む。）

反応：興味津々の様子

T2：「可也小で、けがの多い学年は何年生だと予想しますか。」

C1：「1年生と2年生だと思います。」

○保健室の来室状況（けがの来室者をグラフにしたもの）を提示する。

T2：「低学年のけがをへらすために、けがについて学習した5年生で何かできることはありませんか。」

C2：「ポスターを作るのはどうだろう。でも、絵だけ見ても分かりづらいかな。」

C3：「危ないよって声かけするのは、どうかな？一人ずつに言っていくは、大変だよね。」

C4：「タブレットで、写真を撮って見せるのはどうですか。」

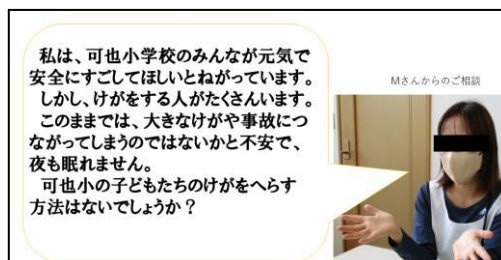
C5：「スライド機能を使ったら、写真を載せて文字も書けます。」

T2：「いいですね。スライドに写真や文字を載せて、低学年のみんなにけがをしないための方法を伝えましょう。」

反応：子供たちからはたくさんの拍手があった。

○今後の流れ（資料23）を、提示して見通しをもつことができるようにした。

【低学年への安全啓発活動についての子供とのやりとり】



【資料22：相談内容の提示物】



【資料23：活動の予定】

次に、学校生活でのけがの原因・危険予測・回避方法を他者と話し合い、思考できるようにすることをねらいとした。そのために、目標設定シート①を活用し、自己目標を設定した後に、校内や運動場などの写真の資料を班ごとに配付し、けがの起こりそうな場所を見付ける班での話し合い活動（第1回班会議）を行った（写真3）。写真資料は、保健室来室記録からけがの発生が多い場所を選んだものである。写真資料を提示した理由は、学校の場所となると範囲が広く、以前の学習で子供が考えに悩む姿が見られたり、けがの発生場所を見付ける目的からそれてしまったりしたことがあったためである。班での話し合い後、各自の予想した場所実際にいき、タブレットのカメラ機能で危険箇所の撮影をした。そして、各自で撮影した場所の写真を見せながらけがの起こりそうな場所を班で話合った（資料24）。その際、目標シート②（P11・資料13）を活用して、けがの原因を「人の行動」と「身の回りの環境」の視点から伝え、けがを防ぐ方法を伝えた。さらに、班で交流した場所やけがの原因を、学級全体でも共有した（写真4）。ここでは、けがの原因の「人の行動」に関わっている「心と体の状態」と「身の回りの環境」に関わっている地面の固さや天候についておさえた。また、学校で「環境が安全に整えられている場所」のクイズをする場面を設定して、正解の写真（資料25）を提示した。さらに、学校や地域では、事故やけがの防止のために安全活動が行われていることをおさえた。最後に、交通事故の防止について必要なことをねらいとするために、教科書の交通事故の防止に関するデジタル教材を活用して、交通ルール等について学習を行った。

次に、タブレットのカメラ機能を活用した他者と協働した探究学習では、他者と協働した課題解決で、けがを防止するための危険予測や回避方法の考えを深めたり、広げたりすることをねらいとした。そのために、けがの起こりそうな場所を実際に調べ、「けがの防止資料」に載せる画像や動画を協働してタブレットのカメラで撮影しながら、危険予測、回避方法を考える場面を設定した。撮影活動では、子供たちがけがの状況について話し合いながら、見通しの悪い環境での状況設定を動画にする姿が見られた（写真5）。

けがの場所を、班で話し合う子供の写真

【写真3：けがの場所を予想する様子】

タブレットで撮影した場所の写真を、班で見せ合い、発表している子供の写真

【資料24：けがの場所を予想する様子】

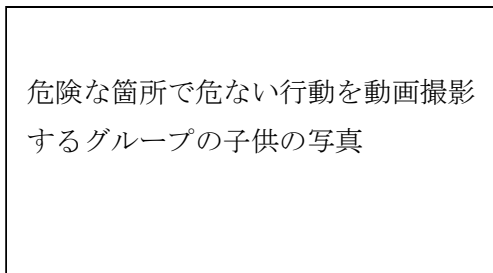
学級全体に向けて発表する子供の写真

【写真4：けがの予想を全体発表する様子】

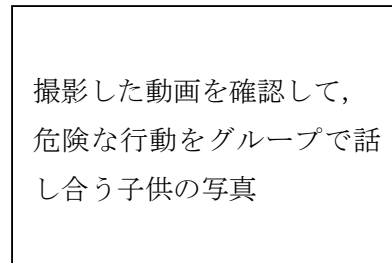


【資料25：学校で環境が整えられている場所】

また、撮影した写真や動画を確認し、試行錯誤しながら撮影する様子が見られた（写真6）。さらに、危険な箇所や行動に新たに気付く姿もあった。撮影活動後は、各自でけがの防止資料作成のための情報を下書きとして学習プリントにまとめた。



【写真5：1年生の教室前で危ない行動を撮影する姿】



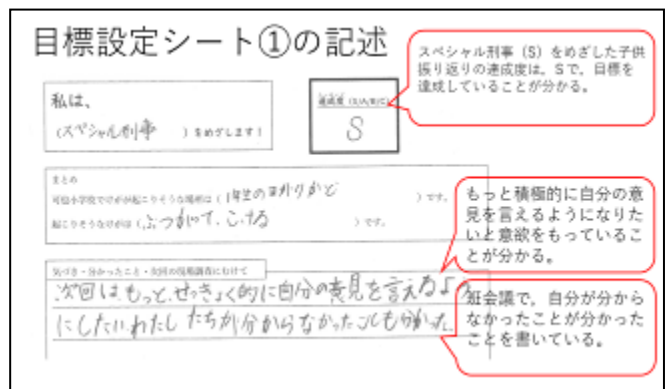
【写真6：撮影した動画を見て話し合う姿】

【考察2】

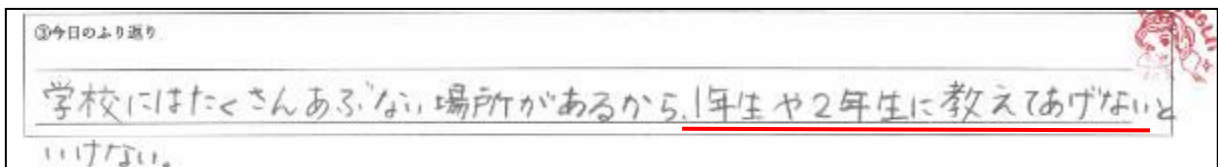
視点2：低学年への安全啓発活動「なりきり！KAYA警察！」での課題解決学習

視点3：タブレットのカメラ機能を活用し、他者と協働した探究学習

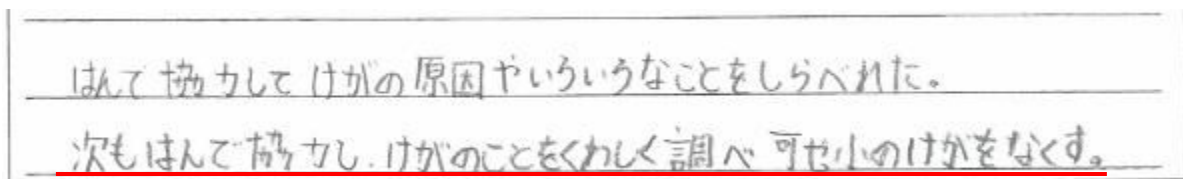
低学年のけがを防ぐために、学校生活のけがに関する課題を見付け、班で協働して解決する学習活動を行い、それを低学年へ伝えていこうとする場面の設定をしたことは有効であった。具体的には、目標設定シート①の記述（資料26）から、けがの予想を人の行動と環境の視点から考え伝えることを達成できた学習の振り返りや、班会議や全体での交流を通して、他者の考えから新たな発見ができたことが分かる。さらに、学習の振り返りの記述（資料27・28）から「学校の危ない場所を低学年へ教えたい」という記述からも、子供の意欲を高めながらけがの課題解決に向けた班会議ができたと考える。



【資料26：目標設定シート①の記述】



【資料27：学習の振り返りの記述①】

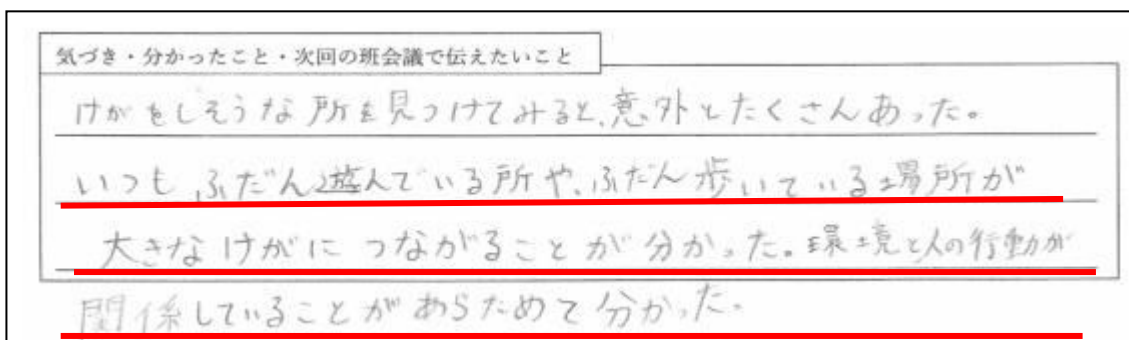


【資料28：学習の振り返りの記述②】

以上のことから、視点2：低学年への安全啓発活動「なりきり！KAYA 警察！」での課題解決学習は有効であったと考える。

一方で、目標設定シートの目標内容を教師側が決めた内容に設定したことは、子供が自ら思考した目標ではないことから、子供と一緒に目標シートを作成する過程を設定する必要があると考えた。

視点3：タブレットのカメラ機能を活用した、他者と協働した探究活動を行い、実際の現場を調べながら、けがの危険予測・回避方法を見付けだす場面を設定したことは有効であった。具体的には、子供の感想の記述「普段気にしていなかった場所が、大きなけがにつながることも分かった」「環境と人の行動が関係していることが改めて分かった」からも推察できる（資料29）。また、学習内で「実際に現場に行くと、今まで気付いていなかったところも危ないことが分かった」との発言が多くあったからである。



【資料29：学習の振り返り記述③】

以上のことから、視点3：タブレットのカメラ機能を活用した、他者と協働した探究学習は有効であったと考える。

#### ウ 視点4（終末段階）体育科保健領域学習・総合的な学習の時間

Google スライドを活用した「可也小けがの防止資料」作成・発表

##### 終末段階（6～8／8時）のねらい

けがの防止について、安全の大切さに気づき、自己の健康の保持増進に進んで取り組むことができるようにする。（学びに向かう力・人間性）

本段階では、けがの防止についての危険予測・回避方法を考え、それを伝えることができるようになることをねらいとした。そのためにまず、「けがの原因」「けがの予想」「けがを防ぐ方法」の3つの視点を挿入したスライド資料を Googleclassroom 上で一人一人に配付した。そして、各自で作成し発表することを再度確認し、現場調査での情報を整理しまとめた下書きの学習プリントを確認しながら作成の様子が見られた（写真7）。さらに、Google スライドのコメント機能を活用して、一人一人の進捗を確認しながら、賞賛の言葉を伝えたり、資料の改善ポイントを伝えた（P12・資料16）。

コメントを見た子供からは、喜びの声があがり、さらにコメントの改善アドバイスから資料の改善を行う姿が見られた。次に、作成した資料を説明するペア交流の場を設定した。活発に

下書きの学習プリントを確認しながら、タブレットで資料を作成する子供の写真

【写真7：けがの防止資料作成の様子】

ペア交流している子供たちは、全体で交流方法の模範として発表をした。その際、学級担任が交流方法の視点を説明することで、交流の方法が分かりづらかったペアも活発に交流をすることができた（写真8）。その後は、班交流をする予定だったが、時間が足りずにペア交流だけとなった。最後に、けがの防止資料を学級で一人一人発表する場を設定した。

作成途中の「けがの防止資料」をペアで交流する子供の写真

【写真8：ペア交流の様子】

発表する子供と、聞く側の子供が相互に理解を深めるために「P-1グランプリ！」と活動の場面を設定をした。発表者以外の子供は、審査員として「①資料の内容」、「②写真や動画の分かりやすさ」、「③声の大きさ」、の3項目で評価をする。「第1回5年〇組P-1グランプリ！」と伝えると、子供たちからは拍手が起こり、「グランプリになるぞ」と気合いの入った声があがった。なお、普段、発言が苦手な子供には、発表の仕方などを個別に声をかけて指導を行った。プレゼン発表では、内容にクイズを入れたり、イラストや背景を入れたりするなど、工夫した資料ができあがった。その後、発表後に、評価点数が高かった子供をグランプリとして表彰し、グランプリの子供2名が低学年である2年生へけがの防止資料の発表をした（資料30）。また、その他の子供のけがの防止資料も掲示を行い、掲示物で学ぶ低学年の姿が見られた（写真9）。さらに、児童保健委員会の5年生の活動として、全校の子供へ向けても「けがの防止資料」の全校発表を行った。

2年生の学級で、けがの防止資料の発表をしている5年生の子供の写真



【写真9：資料の掲示物を見る1年生の様子】

【資料30：2年生の学級で発表している様子】

### 【考察3】

#### 視点4 Googleスライドを活用した「可也小けがの防止資料」作成・発表

けがの防止で学習した知識を活用し、危険予測や回避方法を考えを伝えるために、「低学年に分かりやすい資料」という視点で、ペア交流やプレゼングランプリでの全体発表の活動を設定したことは有効であった。それは、完成した資料（図32）の内容から、けがの防止のために安全に行動し身の回りの環境を整えることを、危険箇所の写真や分かりやすいイラスト等で、情報をまとめられていたからである。また、プレゼン発表では相手に分かりやすい声の大きさや、表現方法を工夫しながら発表する姿が見られた。さらに、発表が苦手な子供からも、「また挑戦したい」という感想の記述があった（資料31）。

普段の学習では発表や発言がなかった子供2名の学習プリント記述

(A児) うまくできたところは、ちょっと小さかったけど、声をだせたことです。

(B児) 動画を作れなかったことが少しくやしいです。また、このようなスライドをつくる機会があったらまた再挑戦したいです。

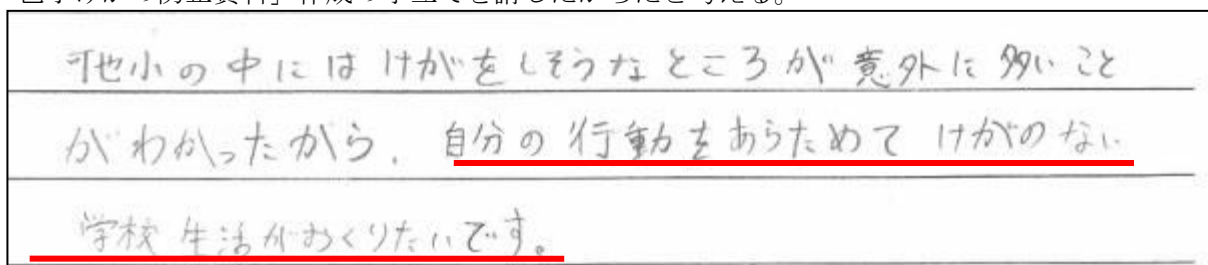
【資料31：発表が苦手な子供の感想】



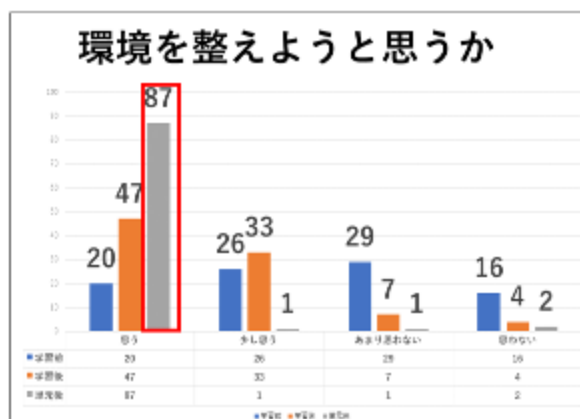
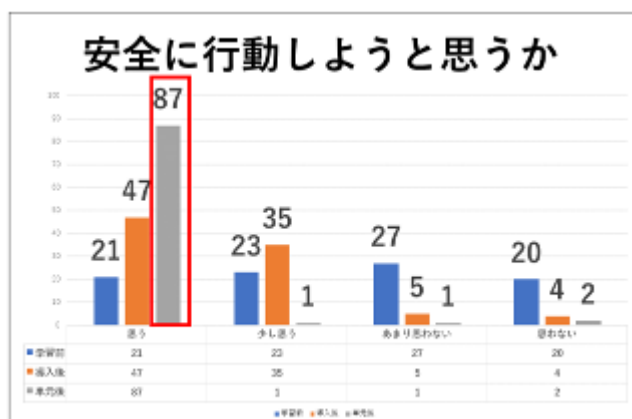
【資料3 2：完成した「可也小けがの防止資料」】

なお、上記の資料はグランプリを獲得した子供の資料である(資料3 2)。この場所は、一昨年、当時1年生の子供が走っていた際に、ドアにぶつかり大きなけがをした場所である。この事例は学習のなかで提示はしていなかったが、子供が自ら危険予測をし発見できたことから、けがの防止の知識を活用し危険予測・回避の方法を考えることができたと分かる。

また、学習プリントの振り返り記述(資料3 3)の「自分の行動をあらためて、けがのない学校生活を送りたい。」などの記述から低学年に伝えるという活動を通して、自らのけがの課題にも気づき、自分の生活にも関連付けて考えることで、自らのけがの防止意識を高めることができたと分かる。さらに、「けがをしないために、安全に行動しようと思うか」「身の回りの環境を整えよと思うか」の問いに「思う」と答えた子供が実証前と比べて、「行動」では6 6名、「環境」では6 7名増えた(資料3 4)。このことは、体育科保健領域学習に総合的な学習を関連づけた「可也小けがの防止資料」作成の手立てを講じたからだと考える。



【資料3 3：学習の振り返り記述】



【資料3 4：令和4年度5年生アンケートの結果】

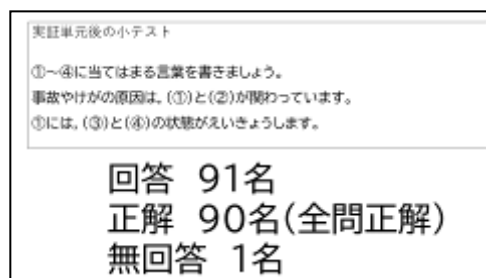
## 8 成果と課題

### (1) 研究の成果と課題

本研究でめざす子供の姿に沿って、成果と課題を明らかにする。

#### ア 身の回りの生活の危険が原因となって起こるけがの発生原因が「人の行動」と「身の回りの環境」であることを理解している子供

実証後の「けがの防止」小テストの回答「けがの原因」について問う問題では、ほぼ全員の子供の回答が正解であった(資料35)。また、無記名の子供1名に、口頭で確認をしたところ、正解を回答していたことから、全員が理解していることが分かった。また、人の行動には「心と体の状態」も含まれていることも理解できていた。これは、視点1において、けがの事例やハンイリッヒの法則、専門性を生かした保健室データや具体的な事例を提示したことが、けがの防止をする意欲を生み、けがの発生原因の理解ができるようになる上で有効であったと考える。



【資料35：令和4年度5年生けがの防止小テスト結果】

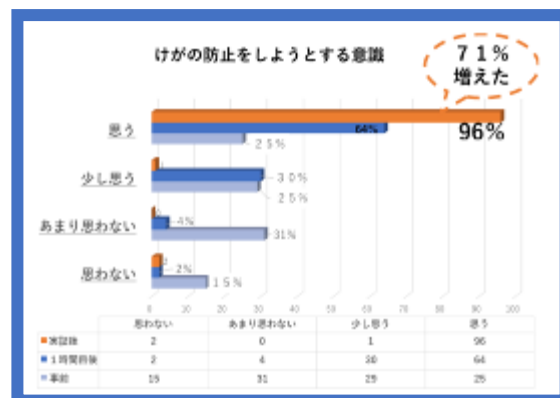
#### イ 学校でのけがの防止についての課題を、他者と協働して解決し、けがの危険予測・回避方法を他者へ表現することができる子供

学校生活から、けがの防止に関する課題を見つけ他者と協働しながら解決に取り組むことが全員できていた。また、目標設定シート①②では子供たちが積極的に目標設定を行い、他者に考えを伝えようとする姿が見られた。さらに、現場調査では、タブレットのカメラ機能を活用し、班で協働して活動することができていた。これは、視点2・視点3において、「低学年へ向けた安全啓発活動～なりきりKAYA!警察!～」の状況設定を行い、他者と協力できるよさを生かしながら学習展開を図ったことが、他者と協働して積極的に課題解決に取り組む子供を育むことができ、大変有効であったと考える。

課題としては、目標設定シート①②の活用方法である。前途したように目標設定シート①②の目標を子供自身が考え、一人一人に目標をもたせることが、主体的で個別最適な学びになったのではないかと考える。

#### ウ けがを防止について、安全の大切さに気付き、的確な判断の下「安全に行動すること」、「身の回りの環境を整える」意欲をもつ、けがの防止意識の高い子供

実証授業後のけがの防止の意識調査の結果では、「けがをしないために、安全に行動し、身の回りの環境を整えよと思えますか」の問いに「思う」と答えた子供が96%と実証前と比べて71%大幅に増えた。単元導入後からも32%増えた(資料36)。これは、視点4において、けがの防止に関する課題解決の成果の情報を分析して、まとめ、他者に伝える活動を通して、保健領域学習で学んだ知識を生かし、総合的な学習の時間の探究活動で、さらに理解を深め、他者へ伝えることで、自らの生活も変えていこうとする「けがの防止



【資料36：令和4年度5年生アンケート結果(実証後)】



意識」の高まりがあったからである。このことから、本研究で総合的な学習の時間を関連づけたことは、体育科保健領域「けがの防止」の学習から、さらに学びを深め、子供が事故やけがから自分の命を守る知識を実践的に役立てることができる「生きる力」になったと考える。

私は、「子供が学校生活や日々の生活で、安全に行動し、身の回りの環境を整える力をつけ、大きな事故やけがを防ぎ、健康で安全に過ごすことができるようになり、その学びを、ずっと先の将来にまで生かしてほしい」という思いで、保健領域学習と総合的な学習の時間を関連づけた手立ての工夫を行い、子供のよさを引き出しながら本研究に取り組んだ。この成果は、昨年度から走るなどの行動が目立ち、教師から何度も指導をされたきた子供たちが、本研究の授業後に、「走らないようにしよう」と自ら声を掛け合う姿や、学級でけがが起こった際に、「どうしたらけがが防げたか」を子供たち同士で話し合い、解決方法を学級担任に伝える姿、さらには、けがをした1年生を見つけた時に、けがをしないためにできることを5年生同士で話し合いながら優しく教える姿など、子供の成長した姿を日頃の学校生活から多く見ることができた。これは、「子供のけがの防止意識を高めた」ことが最も重要で有効であったからだと考える。

以上のことをまとめると、以下の3点の成果があったと考える。

- 授業に参画し、養護教諭の専門性を生かして、けがの事例やハインリッヒの法則、保健室来室記録等の具体的なデータを示す工夫を行うことは、子供のけがの防止の意識を生むことができ、けがの防止の学習を効果的に進める上で有効であった。
- けがの防止に関する課題を解決するために、ICTを活用した、班での協働的な活動や、探求的な活動の学習展開を行うことは、子供が協働して課題の解決に取り組みながら、学びを深めることができ有効であった。
- けがの防止に関する知識を他者へ伝える活動を行うことは、子供たちの知識の定着を図り、自らの生活でも生かせる実践力となり、けがの防止意識を最大限に高める上で有効であった。

#### 〈参考引用文献〉

- ・「令和の日本学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～（答申）（中教審第228号）
- ・小学校学習指導要領解説 体育編 文部科学省 東洋館出版
- ・小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 文部科学省 東洋館出版
- ・今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 文部科学省 教育出版
- ・小学校学習指導要領体育科の改訂ポイント 文部科学省スポーツ庁政策課教科調査官 高田 彬成 森良一
- ・教育出版 column 第4回「持続可能な社会の創り手は、どのように育てたらいいですか？」
- ・実践行動変容のためのヘルスコミュニケーション人を動かす10原則 著者：奥原剛 大修館書店
- ・「なるほど！保健の授業づくり一令和4年度発行」 埼玉県学校保健会 埼玉県教育委員会
- ・福岡県若手教員研修（養護教諭）1年目 保健教育の考え方・進め方 福岡県体育研究所
- ・保健教育の指導と評価 令和4年度版 公益財団法人 日本学校保健会
- ・新しい5・6保健 東京書籍株式会社
- ・ラーニングピラミッド アメリカ国立訓練研究所